

# 愛の鞭より言葉の鞭

スウェーデン

元ハンドボールU-19男子代表監督 玉村健次 / 湧永製菓

引退後にジュニアの代表コーチを務めながら、もつと海外から様々なことを吸収し指導に役立てたいという思いが募る中、JOCの海外研修に参加できました。ジュニアの強化に成功しトップへの復活を果たしていたスウェーデンで、ぜひその手腕を学ぼうと99年から1年間の研修でした。

## 「俺たちはバイキングの子孫」

スウェーデンで一番人気のあるスポーツはサッカー、二番目はアイスホッケーです。また、室内ホッケーも盛んでプロのリーグもあります。その他テニスや、陸上からもメダリストを輩出するなどスポーツ大国。研修先で、現地の指導者たちにスポーツ大国となった理由を聞くと、笑顔で「俺たちはバイキングの子孫なんだ」と。「バイキングは戦に負けたことがない、だから我々も負けるわけがない」という話からは、彼等の民族としての誇りを感じました。

スウェーデンにはたくさんハンドボールクラブもありますが、実力のある選手はド

イツなど海外のリーグでプレイします。若い選手たちは、いつか海外で活躍し富と名声を手にするという夢に目をきらきらさせていました。

僕がお世話になったのは、スウェーデン第二の都市ヨーテボリにある地域クラブ「IKセベホフ」。ヨーロッパ全体として学校スポーツはほとんどなく、スポーツ振興は地域のクラブが主体です。様々な種目・チームがあり、ハンドボールでは年齢毎にトップチームから5歳のチームまでありました。

## モチベーションを高める練習

当時、頂点を目指していたスウェーデンのナショナルチームからは、ジュニア強化策が明かされることはありませんでしたが、クラブの指導からこの国の基本姿勢は十分かま見ることが出来ました。

クラブに入会すると平日は練習、土日は必ず試合です。練習時間は各年代にチームがあるため、一日1時間のみ。しかし練習中に選手が足を休めることはありません。

ハンドボールの試合時間は後半30分のため、試合で最大のパフォーマンスを発揮するには、1時間の濃密な練習は効率のよいものです。

スウェーデンの指導者に「日本のジュニアは日どのくらい練習するの?」と聞かれて、高校の部活動なら3時間ぐらいと答えたところ、ハンドボールの試合時間が3時間だったら、お前たちはワールドチャンピオンになれる!と驚かれました。日本で行っていた練習がいかに効率が悪いかを反省させられました。

クラブに多世代のチームが所属するメリットは相当なものです。まず、ジュニアたちのモチベーションは大変高い。常にトップチームの練習を間近でみることで、試合でも結果を出せば、一つ上のカテゴリーに入る事ができるため、自然と切磋琢磨する環境が生まれます。実際に体験して驚いたのですが、本来接触プレイの多いハンドボールで、練習でもほとんど格闘技かけんかかといったほどからだをぶつけ合っていました。その後シャワーを浴びると何事もなかったかのように仲良くし

## Welcome to Partille Cup 2009

This summer a whole world unites

Many handball players and leaders dream of taking part in Partille Cup. Some, for the opportunity to measure their skills against international opposition, others, to simply gather together in one place, with handball as the common interest. A place where differences such as religion and skin colour make no difference. A place that creates memories for life.

Partille Cup is the world's largest handball tournament and has been bringing young handball players together for 40 years. For some people, 40 years is a long time, but for us it does not seem so long ago that Oppsal IF from Norway won the first Partille Cup in the Boys 18 class. Each year, in 1970, 140 teams from 8 nations took part. In 2008, over 900 teams from 50 nations participated in the most international handball tournament ever. Partille Cup is still growing, and that is a sign that a lot of people are happy with the tournament, and we are constantly faced with new challenges.

We hope that your team would like to join us in celebrating our anniversary as we offer a number of extra activities that will make the 2009 edition of Partille Cup a very special one. In this anniversary invitation, we will also provide a look back at previous tournaments. Partille Cup is handball, but also so much more. It is decades of friendship gathered in one place. It is a festival where everyone is invited. A festival with many unforgettable moments. When we salute 40 years of Partille Cup, we hope you will be there. Together we create history.

You are all very welcome!

  
Stefan Albrechtsson  
President

  
Fredrik Andersson  
General Secretary



ヨーテボリでは、世界中から1000チーム以上が参加するジュニア・ユースの大会が、毎年催される

# 「海の向こうのコーチング」

ている。ときに服が破られることもある、それでもからだを張って守るのがハンドボール競技だ。という意識、勝負強さを子ども頃から養っているわけです。

## 人を育てる言葉

プロと呼ばれる指導者はトップチームのみで、ほとんどのクラブは地域の父母がボランティアでやっています。しかし、指導には必ずライセンスを取得する必要があります。医学や心理学などの講習も受けています。

指導では「人を育てるには、やっぱり言葉が一番だ」とよく聞きました。細かいところをよく見て一人ひとりに話しかけ、チーム練習では全員に向けて声をかけるなど使い分けができています。「いいプレイでも悪いプレイでも何か言っただけのこと、多感な時期の子どもたちは競技をもっと好きになるんだ」と。

単に甘いことだけ言っているわけではないですね。だから厳しいプレイには厳しく怒

る。かつて日本のスポーツには「愛の鞭」という発想がありました。が、からだの痛みよりも言葉の痛みのほうがより心に残る。その厳しさをスウェーデンで実感しました。意外だったのは、練習時にスキンシップが多いことです。監督は選手がナーバスになっている時、モチベーションが高すぎる時など、軽く触ってほそと「今日はいけるぞ」と声をかけます。俺は見ている」と伝えることで、選手の心にプラス作用があるようにした。ナショナルチームでも、親子ほどに年の差がある監督

と選手たちの間には、息子と父親のような深い愛情を感じました。

## 本物のスポーツ文化とは

スウェーデンで印象深かったのは、人々のライフスタイルに自然とスポーツが溶け込んでいる姿です。寒さの厳しい北欧では室内に籠もる時期も長いのですが、2カ月ほど訪れる夏は誰もが外で活動します。高齢でも構わず肌を出すし、長期の休みをとって海や山へ出かけます。その時期以外にも、ジョギングやテニスなど、なにかしらみなスポーツをしている。車の中には必ずスポーツバックが入っていました。50を過ぎた方が短パンとソックスでサッカーに興じる姿も見ましたし、スポーツを心から楽しんでいました。スポーツが人生の中で大きな位置を占めている、スポーツが



練習は1日1時間、しかし濃密で効率が良い(クラブメンバーと・上段左端が筆者)

選手への言葉かけも以前より考えるようになりました。現在地域の小学校で子どもたちに指導をする機会があるので必ず「君たちはいろんな種目がある中でハンドボールを選んでもくれた。俺は凄く感謝しているよ」と、ハンドボールをプレイする誇りや喜びを共有することから始めています。

今年、小中学時代に私やチームの勇姿に憧れ、県外に出て自分のプレイを追求していた選手が湧永製薬に入社してくれました。その選手はずっと湧永に入りたいという夢を持って競技を続け、自分の生まれた町への誇りとチームに愛着があり、高い志を持っています。今後も、競技を活性化すべくジュニア層の指導を続けていきたいと思っています。



IKセベホフのチームディレクター・ステファンと(左が筆者)

高齢でも構わず肌を出すし、長期の休みをとって海や山へ出かけます。その時期以外にも、ジョギングやテニスなど、なにかしらみなスポーツをしている。車の中には必ずスポーツバックが入っていました。50を過ぎた方が短パンとソックスでサッカーに興じる姿も見ましたし、スポーツを心から楽しんでいました。スポーツが人生の中で大きな位置を占めている、スポーツが

本当の文化になっているのを目の当たりにしました。海外での経験から、指導も練習方法も常に変化しつづけるべきだと思ふようになりました。他競技でも、結果を出し続ける指導者は昔から同じ指導を続けているのではなく、新しいことをいち早く取り入れ、変化を恐れない方が多い。常に勝利するためには大事な姿勢だと思えます。

【たまむら けんじ】  
1961年大阪府生まれ。大阪体育大学卒業後1985年より湧永製薬に所属。ソウル五輪に出場し、日本代表左腕のエースとして活躍。引退後は湧永製薬で指導に努める傍ら、日本代表ジュニアのコーチ、監督を務める。2005年U-19男子日本代表監督。日本体育協会公認ハンドボール上級コーチ。